

慶應義塾大学教養研究センター主催

第二回 社会・地域連携セミナー

なぜ SFC から学生主導の地域連携プロジェクト
が次々と生まれるか？

2011 年 10 月 29 日(土) 14:00～19:00
慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎 2 階 大会議室にて

2011 年 10 月 29 日

教養研究センター主催

第 2 回 社会・地域連携セミナー

—— なぜ SFC から学生主導の地域連携プロジェクトが次々と生まれるか？ ——

進行：種村和史（教養研究センター副所長 商学部教授）

14:00 挨拶 不破有理（教養研究センター所長 経済学部教授）

講師紹介、本日の内容、進め方（種村和史）

14:05 社会イノベータを生み出す SFC のエコシステム（金子郁容 政策・メディア研究科教授）

14:45 SFC における地域連携による学びの共同体形成（飯盛義徳 総合政策学部准教授）

15:25 休憩

15:35 SFC の学生による研究プロジェクト報告（各発表 15 分＋質疑 5 分）

- ・ 高校生のための起業家精神育成プロジェクト（磯谷美帆 総合政策学部 3 年）
- ・ 上五島元気プロジェクト（重富渚 総合政策学部 3 年）
- ・ 酒田ラーメンプロジェクト（中山太護 政策・メディア研究科修士 2 年）

16:35 ディスカッション

17:00 懇談会

19:00 散会

はじめに

商学部教授 種村 和史

本日はご多忙にもかかわらず、第二回社会・地域連携セミナーにご参加いただき有り難うございます。教養研究センターでは、社会・地域と連携した教養教育のビジョンを作り上げ、具体的な教育プログラムを策定することを中長期の課題として位置づけています。このセミナーは、現在行われている様々な活動の実態を把握し、それぞれの特徴を知ると同時にそれぞれが抱える問題点をも洗い出し、特長を生かしつつ問題点をスムーズに解決していくためにセンターとして何ができるか、また義塾の関係諸部門とどのような連携・協力体制を構築していくべきかを考えることを目的にして行われています。また同時に、他キャンパスで展開されている社会・地域連携の活動を包括的に把握し、それらとの協力を模索することも目的の一つとしています。

第一回のセミナーでは、教養研究センターのプロジェクトを中心に、日吉キャンパスの教員によって行われている社会・地域と連携した教育活動を、主催されている先生方からご報告いただきました。ご報告を通じて、各教員の熱意に支えられて多様な特徴を持った活動が活発に展開されている様子を知ることができました。それと同時に、個々の活動を支える仕組みや全体的ビジョンがないが故に、主催なさる教員の熱意と労力に全面的に頼らざるを得ず、そのために活動の継続性という点で大きな困難にさらされていることも再認識しました。今後、自由な活動を保証しつつ、教員の熱意に過度に依存しない永続的なものとしていくために、教養研究センターがどのようにサポートできるかを考えることが必要だと実感した次第です。

この問題を考えるためには、日吉以外のキャンパスにおける活動の実態を学び参考にすることが必要です。このような考えに立ち、第二回目の今回は湘南藤沢キャンパス（以降SFC）の先生と学生さんを報告者としてお迎えしました。ご存じの通り、SFCでは実に活発な社会・地域連携活動が展開されて、噂を聞くだけでも圧倒される思いです。日頃から驚きとともに、なぜこのようなことが可能なのか興味津々で見えておりました。活発な活動を生むSFCの環境とはいかなるものか、ま

たなにが活動を支えているのか、それを知ることは、教養研究センターの今後のビジョンを考える上で、大いに参考となることでしょう。

本日は、この分野においてSFCで長年指導的な立場でご活躍しておられる先生方お二人を講師にお迎えしました。政策・メディア研究科教授の金子郁容先生と、総合政策学部准教授の飯盛義徳先生です。お二人にSFCの秘密をざっくばらんにお話ししたいと思っています。また、本日は飯盛先生のご指導のもとユニークな活動を行っている学生さん達にもお越しいただいています。後ほど学生さん自身にSFCの活動の実際をご報告いただきます。長時間のセミナーとなりますが、ぜひSFCの実力と「学生力」をご堪能ください。それではよろしくお願いいたします。

※ なお金子郁容氏（政策・メディア研究科教授）による報告「社会イノベータを生み出すSFCのエコシステム」は発表者都合により割愛しました。

SFC における地域連携による学びの共同体形成

発表：飯盛義徳（総合政策学部准教授）



社会・地域連携セミナー

なぜSFCから学生主導の地域連携プロジェクトが次々と生まれるか？
SFCにおける地域連携による学びの共同体形成

2011年10月29日

慶應義塾大学総合政策学部
飯盛義徳、MBA、Ph.D.
isagai@sfc.keio.ac.jp
http://isagai.sfc.keio.ac.jp/



1



飯盛義徳研究会の活動

地域の元気の処方箋を探究



...

経営学+ひとづくりの視点



4



自己紹介



2



取り組んでいる研究

- テーマ
 - 地域のつながり形成、地域資源の展開メカニズム
 - ファミリービジネスにおけるイノベーション過程
 - 社会科学におけるアクションリサーチの方法論
- 論文、書籍（地域づくり関係の主なもの）
 - 『元気村はこう創る』日本経済新聞社、2007年。
 - 「地域のつながりを取り戻す」国際大学グローバル・コミュニケーション・センター『智場』No.111、2008年4月。
 - 「情報技術で地域を拓く」『日経ネット時評』2008年12月。
 - 「ひとづくりとまちづくり」『三田評論』2009年3月号。
 - 「地域再生とひとづくり」三菱UFJリサーチ&コンサルティング『季刊 政策・経営研究』2009 No.2、2009年5月。
 - 『ケース・ブックⅣ 社会イノベーター』慶應義塾大学出版会、2009年。



5



自己紹介

- 飯盛義徳（いさがいよし のり）、博士（経営学）
 - 慶應義塾大学総合政策学部 准教授 兼 政策・メディア研究科委員
 - 東京大学、佐賀大学、東北公益文科大学などの非常勤講師
 - 総務省過疎問題懇談会委員、総務省地域力創造有識者会議委員、総務省地域づくり懇談会委員、総務省人材力活性化研究会座長、国土交通省奄美群島振興開発審議会委員、長崎県総合計画懇談会委員、高知県集落支援アドバイザーなど
 - NPO法人鳳雛塾 副理事長（ファウンダー）
- 略歴
 - 1964年 佐賀市生まれ
 - 1983年 長崎私立青雲高等学校卒業
 - 1987年 上智大学文学部卒業（体育会陸上競技部副将、体育会本部情宣部長）
 - 1987年 松下電器産業（株）入社（富士通出向など）
 - 1992年 慶應義塾大学大学院経営管理研究科修士課程入学
 - 1994年 同校修了後、飯盛教材株式会社入社
 - 1997年 常務取締役就任
 - 1999年 佐賀大学理工学部寄附講座客員助教授
 - 1999年 アントルプレナー育成スクール「鳳雛塾」設立
 - 2001年（有）EtherGuy設立、代表取締役
 - 2002年 慶應義塾大学大学院経営管理研究科博士課程入学
 - 2005年 同校修了後、慶應義塾大学環境情報学部専任講師就任
 - 2008年 慶應義塾大学総合政策学部准教授就任



3



推進している研究プロジェクト（一部）

- 高校生のアントルプレナー育成（VITA+）
 - 佐賀、高知、和歌山、藤沢などでの実践
- ファミリービジネス
 - 本坊酒造、タキヒヨー、にんべん、法師などの事例研究
 - 福井などでの人材育成講座
- 地域再生
 - 高知県、福岡県、長崎県などの活性化
- 地域活性化と人材育成
 - 地域資源をテーマとしたケース教材開発、人材育成講座
- 地域情報化
 - CANフォーラム、地域情報化研究コンソーシアムの運営
- 鳳雛塾
 - 藤沢、横浜、埼玉での実践、運営支援
- インターネット市民塾
 - SFC市民塾のコンテンツ開発、学びの共同体形成



6



7

概要

- 設立：1999年（2005年7月NP0化）
 - 理事長：指山弘義（佐賀銀行会長）→現・富崎龍夫
 - 副理事長：飯盛義徳（ファウンダー）
 - 事務局長：横尾敏史（佐賀銀行）
- ミッション：鳳雛（未来の英雄）を育む
- 塾生：約350名（2009年3月まで）
- 運営
 - スタッフ：専任講師2名、助手1名、事務局1名
 - 年間運営予算：約30万円
 - ・ 2005年度から2007年度までは、経済産業省より1200万円の助成
 - 年間約16回（月に2回）の授業
 - 年間受講料：社会人1万円、学生5千円

Yoshinori Isagai

10

活躍するメンバー

- 南瑛子が、SFC AWARD受賞（2005年度）
- 浮津弘康が、慶應義塾塾長賞受賞（2005年度）
- 花崎智弘が、SFC政策研究支援機構にて助成金獲得（2005年度）
- 花崎智弘、村上聡、森山明能が、それぞれ、第7回湘南ビジネスコンテストにてビジネスアイデア大賞受賞（2006年度）
- 横山一樹が、第1回Keio Business ContestでPlatinum Award受賞（2006年度）
- 西田みづ恵が、SFC政策研究支援機構にて助成金を獲得（2006年度）
- 西田みづ恵が、SFC AWARD受賞（2006年度）
- 小河菜千が、SFC政策研究支援機構にて助成金を獲得（2007年度）
- 山崎千聡が、SFC政策研究支援機構にて助成金を獲得（2008年度）
- 伊藤妃実子が、SFC政策研究支援機構にて助成金を獲得（2009年度）
- 伊藤妃実子が、SFC AWARD受賞（2009年度）
- 大木洵人が、SFC AWARD受賞（2009年度）
- 次田尚弘が、SFC AWARD受賞（2009年度）
- 坂根加奈子、蒲地亜紗、大木洵人が、SFC政策研究支援機構で助成金を獲得
- 大木洵人、次田尚弘が、SFC AWARD受賞（2010年度）

Yoshinori Isagai

8

特徴

- ケースメソッドの導入
 - ケース教材の独自開発
- オープンポリシー
 - 多彩な方々が机を並べて議論
 - ・ 若手企業家だけでなく、行政、教員、議員、マスコミ、高校生も参加
 - ・ 毎回OBや塾生の知合いが参加
 - 授業後は必ず交流会（佐賀銀行社員食堂など）
- 情報技術の積極的利用
 - ネットで連絡、課題、議論、教材提供
 - ・ 授業の映像（一部）も公開
 - 遠隔授業の実践（2002年度から月に1回）
 - ・ IPv6、JGNを活用した遠隔授業など

Yoshinori Isagai

11

私の実践（ご参考）

Yoshinori Isagai

9

ケース教材の自作

- 地元企業事例を中心とした教材を10部開発
 - 希少な地方企業、創業事例
 - 4部は映像付デジタル教材として公開

Yoshinori Isagai

12

授業の様子

Yoshinori Isagai

13

鳳雛塾の方向性

学校	教育課題 プログラム	実施プログラム	目的	主な能力
小学校	ケース メソッド	商業体験（仕入から販売まで全て自分たちで企画する）	【キック】 商業の仕組み、 実践を通して 販売に慣れる	自主性、自覚性、 職業観、探究心
中学校	【目的】 ケース企業等 が（各）体験、 しながら	インターンシップ （1泊2日）	【ステップ】 商業体験による 家や会社の経験 及び交流を促す	職業観、探究心、 社会適応能力、 実践的力
高校	職業決定能力 増進教育・職業 能力	（普通科） 企業への 入りのびり 商業体験 （職業科） 職業体験 による 高度な職業 能力を養う	【ステップ】 （普通科） 職業体験による 職業観、探究心、 社会適応能力、 実践的力、 リーダーシップ、 コミュニケーション能力	分析力、企画力、 様々なビジネス 創造力、交渉力、 リーダーシップ、 コミュニケーション能力
大学 （卒業生）	等々	等々	等々	等々
社会人	等々	等々	等々	等々

※起業家の網
「フルタイム」で活躍した社会人
で、その経験を生かして
新卒採用生、等々

※企業が求
める人材

Yoshinori Isagai

16

成果

- ベンチャー、NPO起業など
 - 佐賀県産業ビジネス大賞受賞
 - 中小企業創造活動促進法認定
 - NPO起業
 - 衆議院議員（現・参議院議員）当選
- 情報技術（Gigaビットネットワーク、IPv6など）研究
- 新事業、他地域への広がり
 - 小学生から高校生向けのアントルプレナー教育（キャリア教育事業）など
 - 富山、藤沢、石川、丹波、横浜、埼玉などに伝播
 - 大学教育への広がり
 - ★2003年 日経地域情報化大賞日本経済新聞社賞受賞
 - ★2010年度 地域づくり総務大臣表彰受賞

Yoshinori Isagai

14

各地への広がり

- 富山と越前同盟締結（2004年8月）
 - インターネット市民塾のノウハウ共有
 - 富山鳳雛塾設立（鳳雛塾のノウハウ共有）
 - 富山の企業のケース教材開発、共有
- 藤沢鳳雛塾の設立（2005年度）
- 東峰村鳳雛塾の設立（2006年度）
- 丹波鳳雛塾、横浜鳳雛塾の設立（2008年度）
- 埼玉鳳雛塾の設立（2009年度）

各地域との教材共有や遠隔授業など資源共有の推進

Yoshinori Isagai

17

キャリア教育事業

Yoshinori Isagai

15

越前同盟の締結

Yoshinori Isagai

18



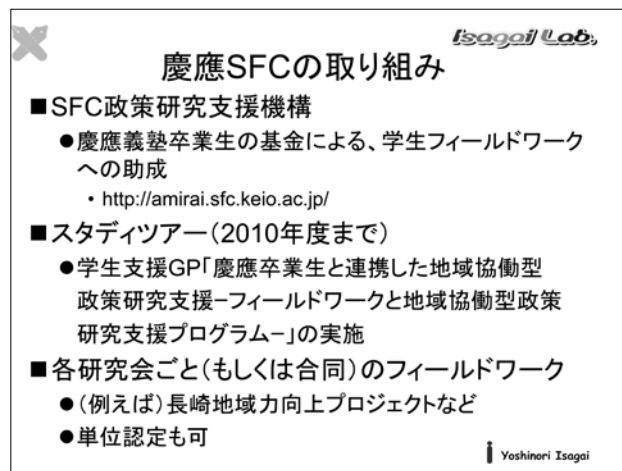
19



22



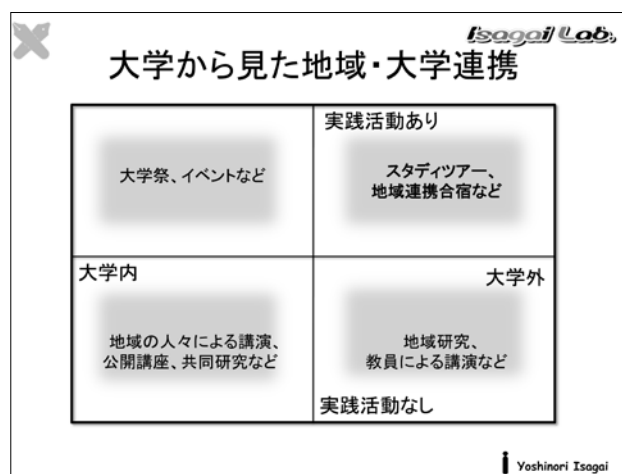
20



23



21



24

Isagai Lab.

ご紹介する取り組み

- 長崎県各地(新上五島町)
 - 連携協力協定を締結し、地域の問題発見、解決のための研究プロジェクトを実践、提言作成(玉村雅敏准教授、古谷知之准教授、飯盛義徳)
- 福岡県八女市、山形県鶴岡市
 - 合宿を通じて、地域の問題発見、解決のための活動を実施、提言発表(飯盛義徳)
- 山形県酒田市
 - スタディツアーを通じて、地域の問題発見、解決のためのプロジェクトを実践(古谷知之准教授、玉村雅敏准教授)

Yoshinori Isagai

25

Isagai Lab.

プロジェクト概要

- 2009年4月、研究・教育活動の推進と地域振興に関する連携協力協定を締結
- 2009年度、長崎県が選出した各市町の地域振興企画(約4市町)を慶應義塾大学が担当
 - テーマは、農水産業の振興、観光戦略など
- 夏期休暇などを利用して研究プロジェクトを推進
 - 希望者を公募(大学院、学部)
 - 集中的な滞在を予定
 - 遠隔会議システムで交流を継続



Yoshinori Isagai

28

Isagai Lab.

公募申請書の内容(ご参考)

- 各プロジェクトの研究テーマと関連したあなたの自身の研究概要
 - (研究の背景、研究目的、研究手法、予想される研究成果等を記入してください。)
- 応募の動機

Yoshinori Isagai

26

Isagai Lab.

活動の様子



Yoshinori Isagai

29

Isagai Lab.

長崎県各地

Yoshinori Isagai

27

Isagai Lab.

学生たちの活躍

つばき油商品開発
体験型観光の連携



特産品や数少ない国産 慶応大生ら中間発表

(出所)長崎新聞2009年9月3日

Yoshinori Isagai

30



31

プロジェクト概要

- 市町村合併後の防災システム整備のために、コミュニティFMの設立を計画
- コミュニティFMを活用した地域活性化のための方策について検討

↓

学生たちの合宿による提言作成発表と
ワークショップによる住民協働型のプロジェクト

34

2011年の活動(住民主導の魅力発信)

新上五島の魅力知って

風景など動画撮影・配信

住民ディレクターが活動

(出所)長崎新聞2011年4月8日

32

地域の魅力発見

学生たちと住民による地域調査・魅力発見活動

35

八女市

33

鶴岡市

36



37

酒田のラーメンプロジェクト

政策・メディア研究科1年 本間 裕二
政策・メディア研究科1年 中山 太護

■第一回酒田スタディツアー（2009年 9月5日～9月10日）
ラーメン店19軒を自転車でもり、酒田のラーメンの現状を把握
「酒田ラーメンおもしろチャリマップ」の作成、「酒田ラーメン＝ワンタンメン」の提案
調査データを基に酒田のラーメンの情報発信の必要性和現状の問題点を指摘

■第二回酒田スタディツアー（2月8～2月11日）
酒田のラーメンを取り巻く課題を関係者で認識し、
情報発信の必要性を考えるため、「酒田ラーメンを考える会議」開催
（ラーメン店主や行政、マスコミなど30名弱の人々が集る）
組織横断的な取り組みが必要と共通認識を持った

■本間・中山で単独訪問（5月2日～5月5日）
今後も酒田プロジェクトを継続するべきかの意思決定のため、4日に
「第二回酒田ラーメンを考える会議」開催
（ラーメン店主、庄内小僧、まちづくり会社、他有志15名弱が集まった。）
横断的組織として任意団体「みんなの酒田ラーメン考え隊」が発足。
「住民を巻き込む切り口としての商品開発」「酒田ワンタンメン」の商標登録に合意。

ST初、地域資源を軸にした団体「みんなの酒田ラーメン考え隊」設立と新プロジェクトの開始

40

学生たちの活躍

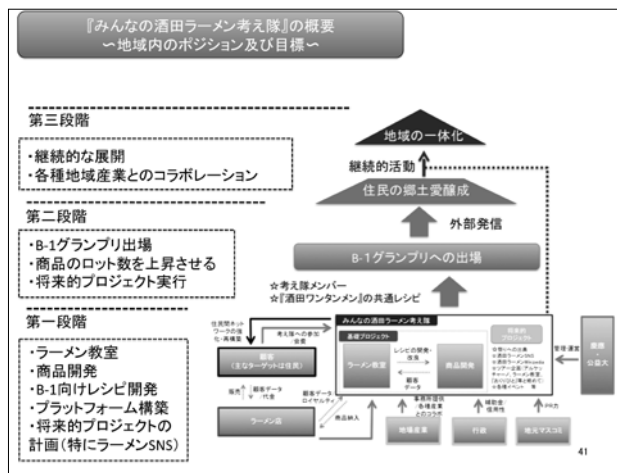
2011年9月7日 庄内日報 1面

特産品素材使い「お菓子」

若い感性でケーキやクッキー
製菓試験作品発表、活性化の提案も

（出所）庄内日報2011年9月7日

38



41

山形県酒田市

修士課程 本間裕二、中山太護 作成

Yoshinori Isogai

39

学生たちの活躍

酒田ラーメン
ブランド化「考え隊」
慶大生ら発足 全国発信

観光用の土産開発、B-1グランプリ出場

（出所）山形新聞2010年8月31日

42

Isagai Lab.

地域づくりとひとづくり

Yoshinori Isagai

43

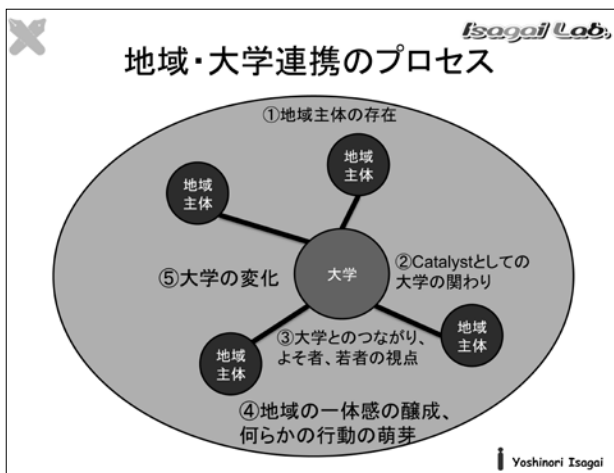
Isagai Lab.

地域資源

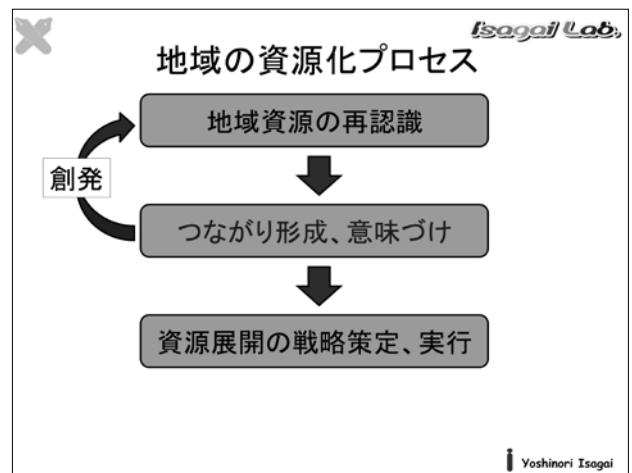
- ヒト
 - 住民、自治体、企業、NPOなどの主体
- モノ(見えるもの)
 - 自然環境、史跡など
- カネ
 - 予算など
- 情報(見えないもの)
 - 歴史、文化など

Yoshinori Isagai

46



44



47

Isagai Lab.

地域の多様性、多義性

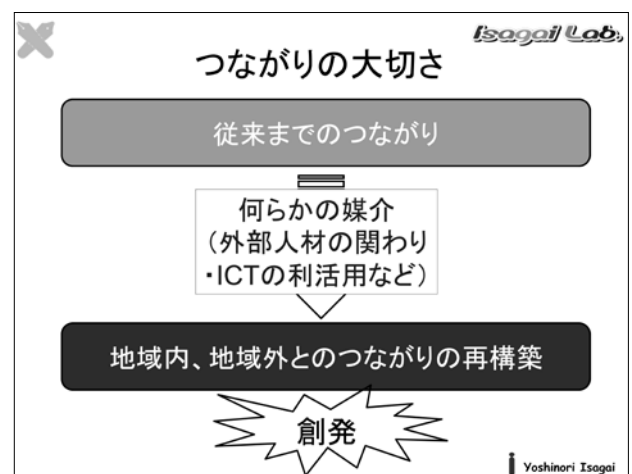
- 多義性、多重性
 - 境界のあいまいさ
- 多様性
 - 多種多様な主体
 - 方向性、意識など

資源となるべきもの
など認識も多様

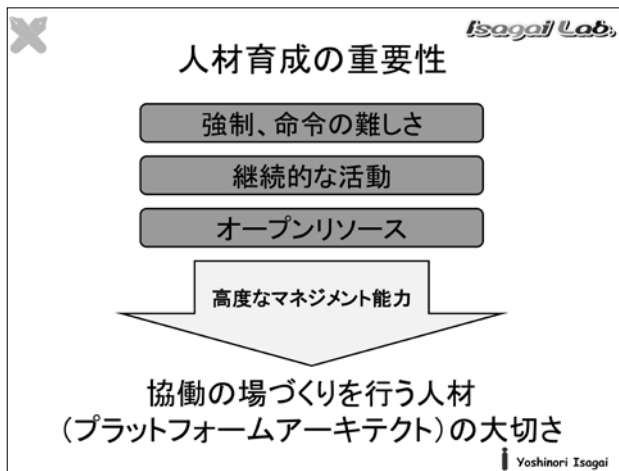
(参考) 森岡清志(2008)『地域の社会学』有斐閣。

Yoshinori Isagai

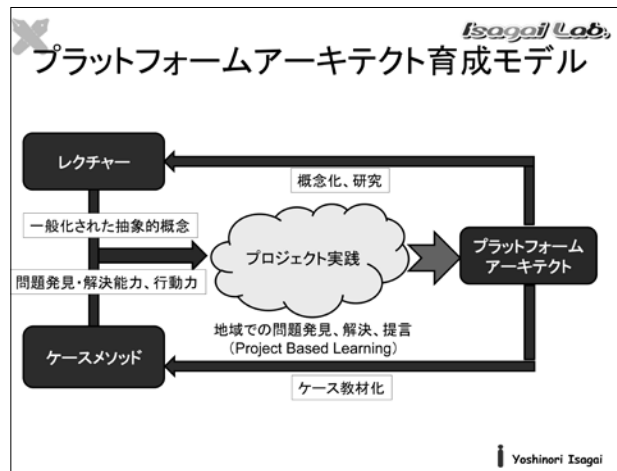
45



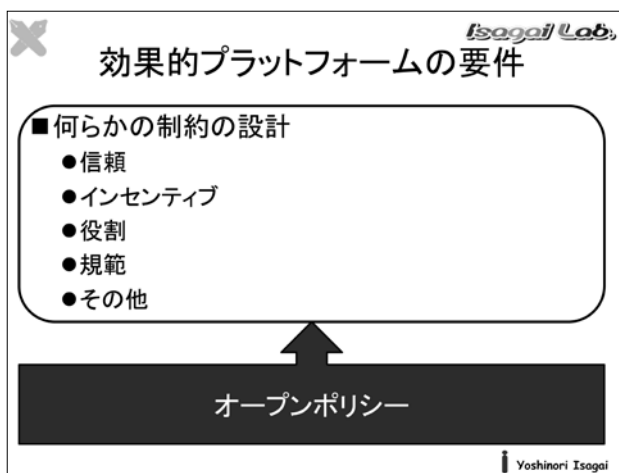
48



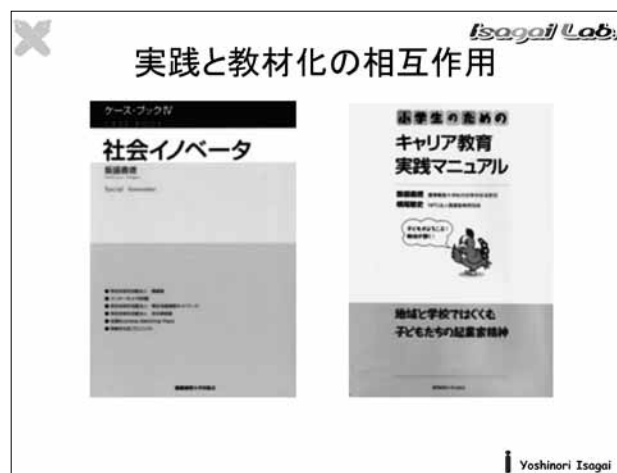
49



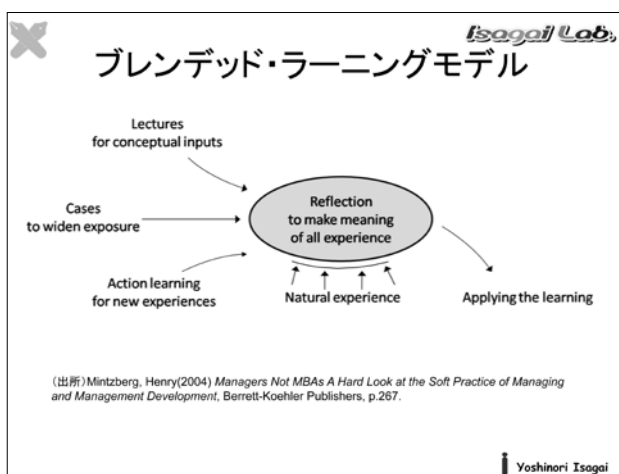
52



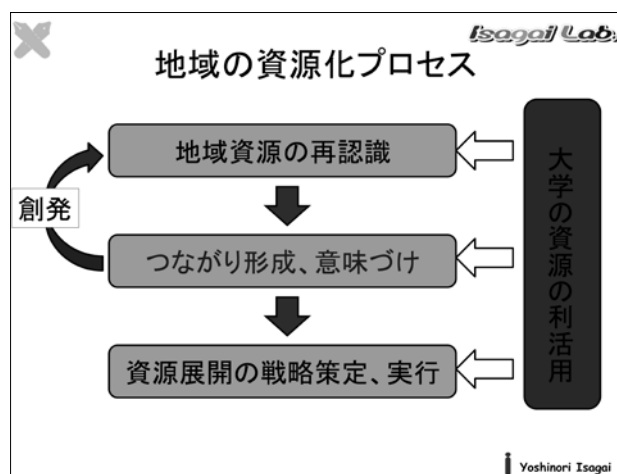
50



53



51



54

地域に果たす大学の役割

- 人材(プラットフォームアーキテクト)育成
- 新しい情報、知、技術の流入(よそ者の視点)
- 失敗を恐れない行動力のある若者の拠点

+ 自治体の協力

地域の資源

地域再生

Yoshinori Isagai

55

問題解決のためのサイクル

(出所) Susman, Gerald I. and Roger D. Evered(1978) "An Assessment of the Scientific Merits of Action Research," *Administrative Science Quarterly*, Vol. 23, No. 4. (Dec., 1978), pp. 588.

Yoshinori Isagai

58

課題と今後の展開

Yoshinori Isagai

56

総合政策学の実践

- 問題発見・解決指向型の研究
- 従来の学問領域にとらわれない研究
- メディアないし情報通信技術の革新とその影響を強く意識した研究
- 結論において何らかの政策的ないし戦略的含意(policy implication)を含む研究

(出所) 岡部光明編(2003)『総合政策学の最先端 I ―市場・リスク・持続可能性』慶應義塾大学出版会。

Yoshinori Isagai

59

地域・大学連携の課題

- インセンティブ設計
 - 研究・教育方法の確立、成果の提示
- 予算
 - プロジェクト実践、研究予算の確保
- 地域情報の共有
 - 地域へのアプローチ方法

Yoshinori Isagai

57

ありがとうございました！
皆さまとの交流を楽しみにしております！

Yoshinori Isagai

60

SFC の学生による研究プロジェクト報告 1
高校生のための起業家精神育成プロジェクト
 発表：磯谷美帆（総合政策学部 3 年）



**ジュニアケースメソッドを用いた
地域における人材育成プロジェクト
VITA+(ビータプラス)**

慶應義塾大学 飯盛義徳研究室
 VITA+代表 磯谷美帆

©VITA+2011 VITA PLUS 1

1

VITA+(ビータプラス)とは

- 2005年4月30日、飯盛義徳研究室の学生5名により発足。
- 「ジュニアケースメソッド」を日本各地の高校生・中学生に実施。

若い世代の「生きる力」の育成に取り組む。
 (「生きる力」= 自ら考え、行動する力・人と繋がる力)

↓

いずれ、まちづくり活動のリーダーやフォロワーに。

元気の源「Vitamin」+つながり「+PLUS」
 =VITA+




©VITA+2011 VITA PLUS 4

4



VITA+(ビータプラス)

©VITA+2011 2

2

VITA+メンバー

- 大久保依美（総合政策学部4年）
- 坂根加奈子（総合政策学部4年）
- 磯谷美帆（総合政策学部3年）：代表
- 加藤史紘（環境情報学部3年）
- 高野未久（総合政策学部3年）
- 藤田薫子（総合政策学部3年）
- 星出直柔（総合政策学部3年）
- 河野佑佳（総合政策学部2年）
- 佐藤友紀子（総合政策学部2年）
- 藤村宏哉（総合政策学部2年）
- 藤原夏希（総合政策学部2年）



©VITA+2011 VITA PLUS 5

5

背景・問題意識

地域における人材育成の重要性に対する認識の広がり

- 総務省
地域を支える人材の確保・定着を図るとともに、個性と活力ある地域づくりを推進するための人材育成に総合的に取り組むことが重要。
- 経済産業省
地域の産業や職業に対する関心や知識を持ってもらうことが、次世代の地域産業の担い手の確保のために重要（経済産業省、2008）。
- 文部科学省
中央教育審議会（2008）は、「生きる力」の課題の一つに、家庭や地域の教育力の低下を考慮した方策が必要。

しかし、市民全体の問題解決の成功事例はごくわずか。
 今後、どのように人材育成を行うか、その具体的方策は見いだせていない。
 特に社会に出たり、地域を離れたりする多くの若い世代に対する取り組みが少ない。

©VITA+2011 VITA PLUS 3

3



ジュニアケースメソッド

©VITA+2011 6

6

ジュニアケースメソッドとは

- ・ ビジネススクール等で使用されてきたケースメソッドの手法を VITA+ が高校生用に独自に開発。
- ・ 実際に起こった出来事を物語風に書いたケース教材をもとに、何が問題なのか？自分だったらどうするのか？と、主人公の疑似体験をし、ディスカッションをする授業。



CVITA+2011

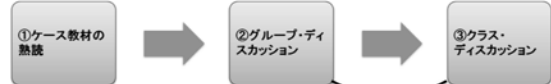
VITA PLUS

7

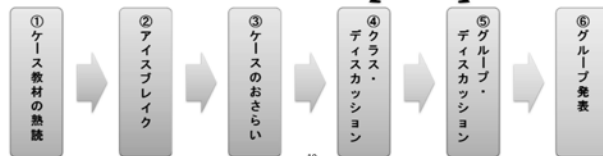
7

ポイント2 要素と流れ

■従来のケースメソッド



■「ジュニアケースメソッド」



Copyright©2010 VITA+ AllRightsReserved.

10

10

ジュニアケースメソッドのポイント

	従来の ケースメソッド	JCM
①ケース教材	ビジネスシーン	まちづくりシーン
②要素と流れ	ディスカッションのみ	ブレンデッド ラーニング
③ケースリーダー	大学の教授	大学生

Copyright©2010 VITA+ AllRightsReserved.

8

8



CVITA+2011

VITA PLUS

11

11

ポイント①まちづくりのケース教材



■まちづくり

- 高知県
 - 「NPO法人砂浜美術館」
 - 「20年目をむかえるTシャツアート展のこれから」
 - 「紅葉前に枝打ちされた土佐道徳のプラタナスの木」
 - 「美しい「緑の孤島」で走り続ける森田支配人の挑戦」
 - 「町と人、人と人をつなぐ道の駅ビオスおおのたの挑戦」
- 和歌山県
 - 「世界文化遺産『紀伊山地の霊場と参詣道』で活躍する語り部」
 - 「和歌山市の商店街『ぶらり丁』のこれから」
 - 「NPO法人紀州えこびと」
- 佐賀県
 - 「水筒さんの夢と思いが地域を巻き込む」
 - 「佐賀市の商店街」
 - 「NPO法人湘南スタイル」
- 神奈川県
 - 「株式会社みやこ」
 - 「NPO法人湘南スタイル」
- その他
 - 「小学4年生で「ペーパーコップ」を開発した丸野道香ちゃん」
 - 「浮城くんの挑戦」
 - 「カモメになったペンギン」

9

9

ポイント3 大学生ケースリーダー

■「ケースリーダーが大学生で良かった」9割

- 大学生の意見を聞くことができた。
- 親近感が持てて、話しやすかった。
- 発言や活動を思いっきりできた。
- 普段接しない大学生と話げできた。
- 自分達だけでは出来ない部分をサポートしてくれた。
- 年代的に、指導する立場でありながら、高校生の気持ちをよく理解されてるなあと感じました。
- 高校生とはまた違う小さい大人の大学生という人の考えを聞けるということ、地域の人ではない人が入ることで別の地域の状況をかきみえることもできるから。
- 高校生に近く、話に入りやすいのでは。

Copyright©2010 VITA+ AllRightsReserved.

12

12

JCMの心がけ

勇気 礼節 寛容

Copyright©2010 VITA+
AllRightsReserved.

13

13

佐賀県での取り組み

県立牛津高等学校での実践

・2005年度から毎年度、ジュニアケースメソッド実施。

・2011年8月18日、19日
選択授業「起業家入門Ⅰ」にて、
高校1年生を対象に、
ジュニアケースメソッドを実施。



©VITA+2011

VITA PLUS

16

16

ジュニアケースメソッド実施履歴

- ・2005年 4月：発足 6月：高知県立大方高等学校(体験版)
- ・2006年 1月：佐賀県立牛津高等学校 2月：佐賀県立佐賀商業高等学校
11月：和歌山県立新宮高等学校 11月、12月：佐賀県立牛津高等学校
- ・2007年 7月：私立武蔵野高等学校 8月：佐賀県立牛津高等学校
8月～12月：高知県立大方高等学校 12月：和歌山県立新宮高等学校
- ・2008年 2月：高知県(有志) 8月：佐賀県立牛津高等学校
- ・2009年 2月：私立高知南高等学校 3月：福井県福井市(有志)
8月：佐賀県立牛津高等学校 10月、11月：神奈川県藤沢市(有志)
- ・2010年 3月：佐賀県立牛津高等学校 7月、8月：神奈川県(有志)
8月：佐賀県立牛津高等学校
- ・2011年 2月：神奈川県立上鶴間高等学校 5月：SFC(有志)
6月：神奈川県立上鶴間高等学校 7月：SFC(有志)
8月：神奈川県(有志)、佐賀県立牛津高等学校
9月：神奈川県藤沢市(有志)、SFC(有志)、
福岡県立藤田館中等教育学校
10月：神奈川県藤沢市(有志)

6年間で、約1100名に
ジュニアケースメソッドを実施

©VITA+2011

VITA PLUS

34

14

福岡県での取り組み

県立輝翔館中等教育学校での実践

・八女市における地域情報化・発信を担う若者の育成を目指す

・2011年9月28日～30日
ジュニアケースメソッドと
地域の魅力を伝えるラジオ番組を制作する
ワークショップを実施。



©VITA+2011

VITA PLUS

17

17

今年度の活動

©VITA+2011

15

15

神奈川県での取り組み

県立上鶴間高等学校での実践

・2012年度から2年生及び3年生の選択授業において、
ジュニアケースメソッドの導入が決定。

・選択授業化に向けて、模擬授業の実施
2011年 2月10日 1年生全クラス対象
7月 6日 1、2年生の選択科目希望者対象
11月12日 中学生(入学希望者)対象
2012年 2月10日 1年生全クラス対象



©VITA+2011

VITA PLUS

18

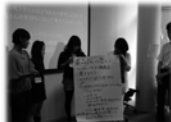
18

神奈川県での取り組み

鎌倉湘南地区高校生インターンシップ

・鎌倉湘南地区の高校生を対象に行なわれたインターンシップ事業

・2011年8月1日、2日
湘南地域の魅力・課題発見を目的としたジュニアケースメソッドとワークショップを実施。



©VITA+2011

VITA PLUS

19

19

成果



Copyright©2010 VITA+
AllRightsReserved.

22

22

神奈川県での取り組み

ふじさわ未来プロジェクト

・藤沢市役所、藤沢市みらい創造財団との共催プロジェクト
・藤沢市在住・在学の中学生・高校生対象。
全6回のワークショップを通し、藤沢市の未来を考える。

・2011年 9月10日 オリエンテーション
10月1日 ジュニアケースメソッド①
10月8日 ジュニアケースメソッド②
10月15日 ジュニアケースメソッド③
11月5～6日 フィールドワーク
11月12日 提言発表会



©VITA+2011

VITA PLUS

20

20

高校生の成長

コミュニケーション	1.多様な考え方の受け入れ
	2.発言する重要性への気づき
	3.話し合う重要性への気づき
	4.思いやりの取得
地域	5.地域へ愛着・関心の芽生え
	6.地域に関する知識の獲得
主体性	7.実践意欲の芽生え
	8.問題発見解決プロセス思考の取得
	9.社会貢献意欲の芽生え

Copyright©2010 VITA+
AllRightsReserved.

23

23

その他

慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスでの実践

・様々な地域の有志の中学生・高校生を対象に、SFCにて授業を実施。

・2011年 5月21日 第1回
7月29日・30日 第2回
9月19日 第3回
11月13日 第4回開催予定



©VITA+2011

VITA PLUS

21

21

大学生の成長

- コミュニケーション能力の向上
- 多角的視点での考察
- 地域への愛着と問題意識の醸成
- 問題発見・解決力の向上



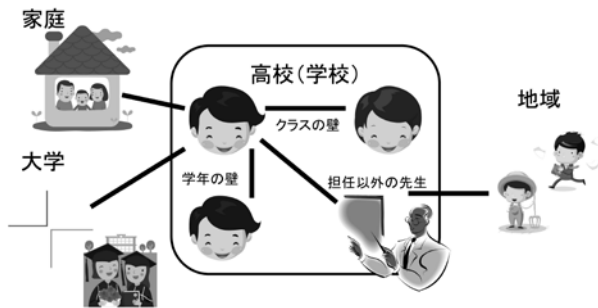
他のプロジェクトのリーダーへ
(リーダーシップ・プロジェクトマネジメント能力の育成)

Copyright©2010 VITA+
AllRightsReserved.

24

24

つながりの形成



Copyright©2010 VITA+ AllRightsReserved.

25

25

ご静聴ありがとうございました

©VITA+2011

28

28

活動助成

©VITA+2011

26

26

活動助成

- SFC政策研究支援機構(2006年度、2007年度)
「和歌山県新宮市における地域の資源を活用した
高校生アントレプレナー育成モデルの構築」
- SFC政策研究支援機構(2010年度)
「地域における高校生対象のアントレプレナーシップ育成
プロジェクトの展開モデルの構築」
- 湘南藤沢学会(2011年度)
【シンポジウム・研究ネットワークミーティング基金】
「ジュニアケースメソッドを用いたアントレプレナー教育研究」

©VITA+2011

VITA PLUS

27

27

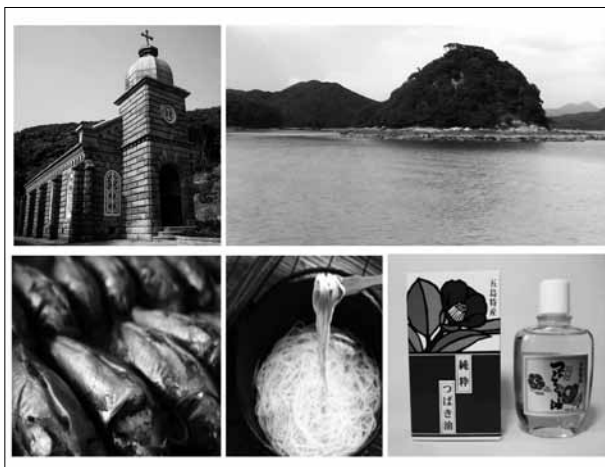
SFC の学生による研究プロジェクト報告 2
上五島元気プロジェクト
 発表：重富渚（総合政策学部 3 年）

新上五島町元気プロジェクト



総合政策学部3年
 重富渚

1



4

新上五島町とは？

2

プロジェクトの目的

- 地域資源の強みの活用
- 住民の方が主体的に地域力向上活動へ取り組む仕組みづくり



新上五島町の地域産業振興や観光振興、まちづくりに繋げる

5

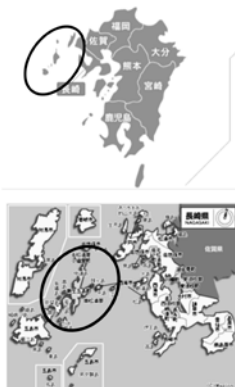
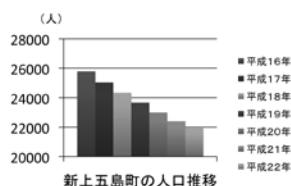
面積

213.98平方メートル

人口

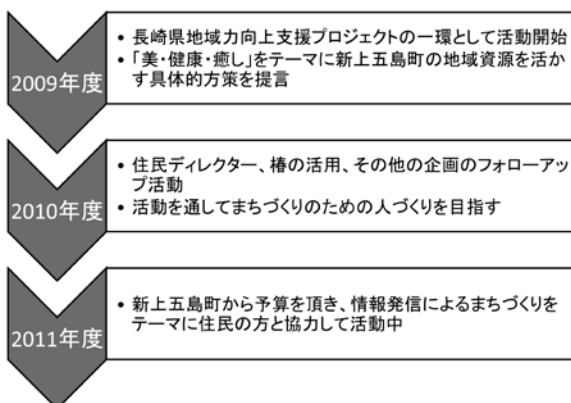
22,671人

(2001年10月現在)



3

プロジェクトの経歴



6

情報発信によるまちづくり

7

活動の様子



10

住民主体の情報発信活動の更なる定着化

情報発信力の涵養

新たなまちづくりの考察

8

今年度の具体的な成果物

- 新たな映像発信場所の獲得
五島産業汽船様の船待合所にあるモニター
SFC学生生協入口モニター



11

今年度の活動内容

日程	内容
8月	第1回まちづくり講座(飯盛義徳准教授) 様々な地域で行われたまちづくりの事例紹介 第1回情報発信ワークショップ 情報発信に必要な起承転結を身につけるためのワークショップ 地域視察
10月21日 ー10月23日	第2回まちづくり講座(SFC研究員) 東峰村の小石原焼のケース・ディスカッション 第2回情報発信ワークショップ 「食」の魅力を発信する映像制作 住民の方との撮影会 五島産業汽船様への営業
11月12日 (遠隔)	第3回まちづくり講座(飯盛義徳准教授) 佐賀銀行風評被害メールのケース・ディスカッション 第3回情報発信ワークショップ 情報の受け手の気持ちになって考えるワークショップ
12月上旬	第4回情報発信ワークショップ
2月	第4回まちづくり講座(飯盛義徳准教授) 第5回情報発信ワークショップ 最終発表

9

- フェリー乗り場、観光スポットなどでの
ポップの設置



12

・ウェブサイト「上五島チャンネル」の開設



13



16

上五島チャンネルとは？

14



17



15

今後の展望

- ・住民による情報発信活動の継続
- ・「上五島チャンネル」の管理者を住民の方へ移行
- ・活動の主体は新上五島町の住民の方
- ・プロジェクトメンバーは活動のサポートを行う



まちづくりリーダーの誕生

18



<http://isagai.sfc.keio.ac.jp/kamigotoch/>

twitter

@kamigotoPJ

19

ご静聴ありがとうございました。



20

酒田ラーメンプロジェクト

発表：中山太護（政策・メディア研究科修士2年）

酒田ラーメンプロジェクト

SFC 政策・メディア研究科修士課程在籍 中山太護

1

2. プロジェクト紹介

みんなの
酒田考え隊

住民参加×埋没資源

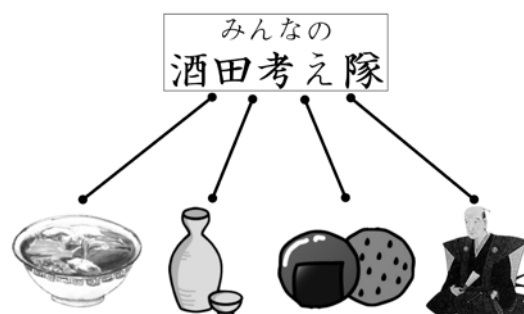
4

Agenda

1. Profile
2. プロジェクト紹介
3. これまでの経緯
4. 暫定的成果

2

2. プロジェクト紹介



5

1. Profile



代表：本間裕二（ホンマユウジ）
SFC研究所上席（訪問）所員
政策・メディア研究科修士課程修了

- ・1985年10月11日生まれ。
- ・千葉県館山市出身。



副代表：中山太護（ナカヤマダイゴ）
政策・メディア研究科修士課程在籍

- ・1987年2月15日生まれ。
- ・山形県酒田市出身。

3

3. これまでの経緯

	2009	2010	2011
大学の枠組	第1回 酒田StudyTour ・2009年9月	第2回 酒田StudyTour ・2010年2月 酒田の ラーメン会議 ・2010年5月	
私的枠組		設立総会 ・2010年7月 営業活動 ・2010年8月	商品発表 ・2011年2月 商品発表（予定） ・2011年12月

6

3. これまでの経緯

第1回慶應スタディーツアー（2009.9）



市の無料観光自転車でラーメン屋を回る

7

3. これまでの経緯

第2回慶應スタディーツアー（2010.2）

報告会

-ヨソモノ視点から酒田ラーメンの魅力を伝える。
-酒田ラーメンの現状についての仮説を提示する。
-組織横断的に人々を集め、意見の交換を行う。

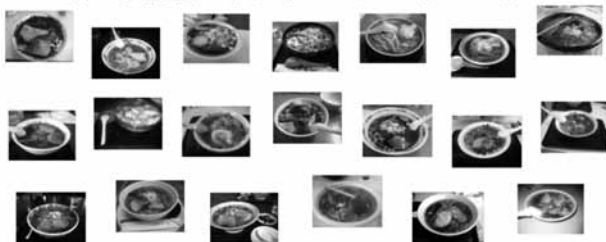


外部発信や食文化継承のため、ラーメン屋、役所、地元の大学、マスコミ等の一致団結した取組が必要との認識を皆が共有。

10

3. これまでの経緯

第1回慶應スタディーツアー（2009.9）



3日間で19杯（1日5・6杯）

8

3. これまでの経緯

スタディーツアー後...



11

3. これまでの経緯

第1回慶應スタディーツアー（2009.9）

いや～、おいしいっすね。。もっと外部に発信しててもいいんじゃないすか？

市役所

もう後さいねがら（後継者がいないから）、終わりますんだ。

店主

え。。

市役所

9

3. これまでの経緯

スタディーツアー後...

その後、進展はありましたか？

結局、あまりこれといった話は無いよね。団結なんて出来ねと思うよ。

行政とか大学とかと話は？

正直、全然出来て無いよね。あの場では皆さんあ言ったかもしれないけど、あの場ではね。

12

3. これまでの経緯

酒田のラーメン会議 (2010. 5)



酒田考え隊設立を決定

- 事前に通達をするも、大きな反応は無し。
- ラーメン屋、マスコミ、TMOの協力の下、考え隊設立を決定。
- 併せて、第一弾目事業「酒田ワンタンメン」の開発決定。

13

3. これまでの経緯

「酒田ワンタンメンα版」商品開発

試食会を重ねる

- 関係者で、2010年9月～2011年2月の間で6回の試食会を開催。
- 予算の範囲内に納めながら、酒田ラーメンの微妙な特徴を表現。
- 本間、中山はSkypeで参加し、開発の方向性をコントロール。



16

3. これまでの経緯

設立総会 (2010. 7. 24)



14

3. これまでの経緯

補足：「酒田ワンタンメンα版」について



17

3. これまでの経緯

営業活動 (2010. 8. 22～8. 26)



15

3. これまでの経緯

補足：「酒田ワンタンメンα版」について



住民参加の仕組：意見を取り入れ進化させる。

18

3. これまでの経緯

補足：「酒田ワンタンメンα版」について

パッケージ

中身

調理イメージ



※チャーシュー・タンマ・ネギはパッケージには含まれない

19

4. 暫定的成果

①住民の参加



2000箱以上売り上げ：アンケート回収率7%

22

3. これまでの経緯

「酒田ワンタンメンα版」発表記者会見（2011.2）

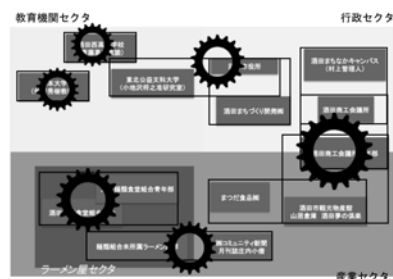


20

4. 暫定的成果

②地域内紐帯の再構築

Before



23

4. 暫定的成果

①住民参加

②地域内紐帯の再構築

③関係者の当事者意識の萌芽

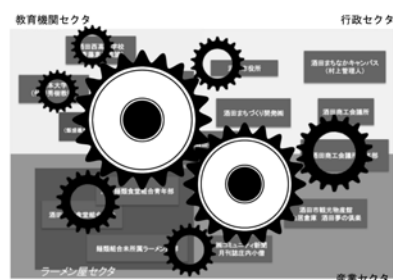
④外部からの認知

21

4. 暫定的成果

②地域内紐帯の再構築

After



24

4. 暫定的成果

③関係者の当事者意識の萌芽



3.11の震災後、酒田ワンタンメンの売上の一部の募金、および被災者への炊き出しを、誰からともなく起案・実行

25

4. 暫定的成果

④外部からの認知

- 「酒田ワンタンメンα版」が親戚伝いに、日本各地の酒田出身者へ。
- (株)ぐるなび総研主催の「ラーメン論文コンテスト」にて、1位獲得。

26

ご清聴ありがとうございました。

27

SFC の取り組みにふれて

教養研究センター所長 不破 有理

日吉キャンパスに位置する教養研究センターは、とりわけ地域に開かれたキャンパスとして長年、多岐多様な活動にかかわってまいりました。大学教育とはキャンパス内に限られるものではなく、社会・地域との相互関係を築きながら、学生を育て、教職員とともに学ぶことであると考えます。学生にとって、大学の4年間は社会に出る前に自由に行動ができる貴重な時間です。この時期に自分の人生を考え、いろいろな人に出会い語り合うことで、社会で目にする多様な価値観に柔軟に対応できる人物として成長する必要があるでしょう。2011年3月11日の大震災・大津波に加え、原発事故はまだ現在進行形の課題として日本に負の遺産を残しました。国際的に勢いを失いつつある日本の社会を担う学生たちに求められるものはなにか。学生を送り出す大学の責務として、慶應義塾がよりよい日本の将来のために学生を育てる務めを負っていることは言うまでもありません。

センターが実施したアンケートで、求められる教養とは「考える力」を育てることとの回答が第一位を占めました。どのように考える力をつける教育ができるかという教育命題は近年とくに模索されている分野です。今回、SFCの取り組みを金子郁容先生からは、社会イノベーターの育成の観点から既存の枠にとらわれず社会に連動した学びの重要性が指摘され、飯盛先生からは、地域活性化のために、プロジェクト・ベースの学習が有益である事例を紹介していただきました。SFCの3人の学生は生き生きとそれぞれの取り組みについて語り、湘南藤沢キャンパスの学習が実践に生かされている様子が実感できる発表となりました。現在進行形の課題にスピード感を伴って取り組む教員と学生の間を広くつなぐ環境を作り上げているSFCには学ぶべき点が多々あります。単なる情報交換の場として終わらさないために、教養研究センターの今後の課題とあわせて考える必要があります。

プロジェクトを通して学生はさまざまな問題を発見し、解決していこうと自発的に動く様子はまさに教育プログラムとしての可能性を示していると思います。問題を発見する視座がなくては、プロジェクトを動かすことはできません。教養研究センターではまさに、その出発点である、問題を発見し論証する学習をアカデミック・

スキルズにおいて行っています。身近な事象を切り取り、論文として成立させるためには、さまざまなものの見方、議論による軌道修正、文献による論証などが必要です。大学在学中により多様な価値観に触れ、試行錯誤し、自分なりの解決策を見出す体験を経ることはきわめて有意義だといえます。それぞれのキャンパスは異なる知的風土があります。まずは慶應の中で実施されている教育活動を学び合い、学生・教職員が他学部、他キャンパスの学生と学び合うことによって、異なる価値観、方法論に出会う場を提供するハブとして教養研究センターは機能する必要があるでしょう。本センターがもつ教育の強みを他のキャンパスの強みに結びつけて、慶應義塾として学生を育てるよりよい教育環境、プログラムの構築のために、今後も協働の場をもうけさせていただければ幸いです。最後になりましたが、第2回「社会・地域連携セミナー」の実現にむけて動いてくださった金子郁容先生、飯盛義徳先生、そして教養研究センタースタッフ柴田浩平、日水邦昭両氏に御礼申し上げます。

慶應義塾大学教養研究センター主催

第二回 社会・地域連携セミナー

なぜ SFC から学生主導の地域連携プロジェクトが次々と生まれるか？

2012 年 1 月 17 日発行

編集・発行 慶應義塾大学教養研究センター

代表者 不破有理

〒 223-8521 横浜市港北区日吉 4-1-1

TEL 045-566-1151 (代表)

Email lib-arts@adst.keio.ac.jp

<http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/>

©2012 Keio Research Center for the Liberal Arts

著作権者の許可なしに複製・転載を禁じます。